

木瓜の花



The background of the cover is decorated with large, flowing, greyish-blue ink-style swirls that resemble clouds or water. These swirls are positioned behind the text, creating a layered effect.

ほ
け
木瓜の花

上
卷

有
吉
佐
和
子

新 潮 社



木瓜の花^{ぼけはな}
上巻

昭和四十八年九月十五日発行
昭和四十八年十一月三十日四刷

定価七〇〇円

著者 有吉佐和子^{ありよしさわこ}

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一 郵便番号 一六二
電話東京〇三(260)二二(大代) 振替東京八〇八

印刷 株式会社金羊社
製本 新宿加藤製本

© Sawako Ariyoshi, 1973, Printed in Japan.

乱丁・落丁本はお取替いたします。

木瓜の花 上巻 目次

第一章 長寿梅 五

第二章 東洋錦 五九

第三章 千鳥 一一七

第四章 嶺の白妙 二二五

第五章 祝錦 二六三

装 题

画 字

原 町

万 春
千 草
子

木^ぼ
瓜^け
の
花

上
卷

第一章 長寿梅

マスコミというものができてから、正子の店の客種は目に見えて変ってきた。それまでは正子の芸者時代の知りあい筋ばかりで、随分早く思いきって芸者をやめ、それからもう三十年近くにもなるというのに、考えてみればずっと花柳界での名残りというか機縁で続いた客筋ばかりだったのだ。ただ一つの例外を除いては――。

しかし終戦後まもなくは、焼け出されの人たちが縁者もろとも転がりこんでいて、一時は泊り客より食客の方が数が多いかと思うときもあった。しかし、まあ正子のところは宿屋だから、閤屋も向うから米や魚を運んで来るといふ塩梅で、食糧難もどうにか切りぬけ、頼ってきていた人たちも日本が復興するのと同じ早さでそれぞれ生活の目途をたてて出て行ってしまう、割烹旅館「喜村」には女主人本来の落着きがようやく戻ってきていた。

戦前の客筋は多く有為転変を地でいって、財閥解体とか、農地解放のもとに、昔の栄華は夢物語になってしまった。正子の店などは決して築地や銀座なみの値段はとっていないのに、辛うじて社長の椅子に残った人たちでも自前では泊れない、勘定が払えないという時代が来ている。

が、よくしたもので昔ならまあ間違つて飛び込んで来るといふ以外には出入りしなかったような人たちが、元氣よくやってきて、食べたり喋ったり、もちろん盛大に飲んで揚句にはハイヤー

を何台も呼び、「ごちそうさまッ」と言つて歸つてしまふ。勘定は会社が払うのである。「対談」とか「座談会」とかいう言葉を正子は彼らから習ひ覚えた。その最中はテープに録音をするので、料理を運んではいけない、廊下でも静かにして下さいとよく言われた。

マスコミという言葉は、正子は比較的早く覚えたのだが、しかし長い間彼女はそれが「枳込み」ということだろうと思ひこんでいた。昔は芝居小屋には枳敷が多く、それは枳型だったから、その連想があつて、安い席は入れ込みと呼んで、大きな一枳に幾客も入れたのである。この二つの言葉を勝手にくつつけたというのも、正子は今の新しい時代というのは高級枳敷がなくなり平土間に客がいっぱい詰つて、みんなが平等の値段で、平等の場所で芝居を見るようなものなのだろうと理解したからだった。

マスコミが英語の *mass communication* を略したものだということを、正子はごく最近になつて、座談会の主客が遅刻したとき、手持無沙汰の連中をもてなして相手をしている最中に知つたのだ。正子の店が繁昌はんしょうしているのも枳込みの時代のおかげだと正子が言つたのを聞きとがめた若者がいた。

「あれ、おばさん、マスコミを知つてゐるの？」

戦前は宿屋の女将はおかみさんと呼ばれ、昔馴染なじみは正子を姐さんねえと言つたものであるのに、近頃の客は正子をおばさんと呼ぶ。

「知つてますよ、平土間でしょ、入れ込みでしょ？」

みんなキョトンとしていたが、正子の解説を聞いて大爆笑になった。説明されてから正子も笑い出し、

「あらまあ英語なんですか。それじゃ私なんかに分りっこありませんよ。私は小学校出ただけで

——、日本語でも漢字が並びすぎると分らないんですからね。だけど民主主義だ平等だって近頃はラジオがずつと言いつ放しでしょう？ だからマスコミって、てっきり平土間に入れ込みになることだと思っただけですよ。うちは宿屋ですけどごらんの通りの割烹旅館ですからね、そこの怪しげなのと違ってれっきとした枩込みだと思って胸を張ってたんです」

「さてまた分らない」

若者たちの一人が首を捻^{ひね}って、

「お婆さん、そこの怪しげなのと違って、というのはどういう意味だい？」

「ああいうのはツレコミでしょう」

再び爆笑になった。

「確かにお婆さんの言う通りだ、マスコミと連込みは大違いよ。ああ、ああ、こいつは傑作だね」

腹を抱えて笑い転がっているところへ、

「いらっしやいました」

という女中の声で、開いた襖^{ふすま}の方を見た連中は、

「ああ、先生」

さっと緊張して坐り直した。

正子は自分の退き際を読み、入ってきた正客に深々と頭を下げ、

「いらっしやいました」

「やあ、お邪魔します」

顔を上げて正子は、あっと声が出そうになったが、急いで目を伏せて、するりと廊下へ出た。

「先生、今です、ね、マスコミに関する珍説を聞いて大笑いしていたところなんですよ」
「ほほう？」

賑やかな会話を後にして正子は自分の居間にひきさがるまで夢中だった。そんな馬鹿な筈はない、あの人が生きている筈がない。生きていたとしても、戦争が終って十六年たっているのだ。それまで会いに来なかった人が、いくら杵込みだって、今頃になって出て来る筈がない。

あれは、三井の団さんが血盟団に殺されたり、世の中が騒がしくなり始めた時代で、最後に会ったのは昭和八年の夏の始だった。庭に芝桜が一面に咲いているときだった。あれから二十八年もすぎているのだ。正子自身が五十八歳になっているのに、かつての恋人が、あのときと少しも変らない年格好で現われるなどという馬鹿な筈はない。山田一人は明らかに当時は正子と同じような年齢だった。そのまま男が齡をとらずにいられる筈はない。

しかし山田一人は、この家では女中の口からも先生と呼ばれていたのだ。正子も女中たちには「松の間の先生」と言っていた。しかも山田一人と瓜二つと思われる今夜の客は、みんなからやはり「先生」と呼ばれている。

正子は居間の片隅にある古びた鏡台の前に坐り、梅模様を散らした油^ゆ塗^ぬを上げて、しばらく自分の顔を見ていた。毎朝大急ぎで薄化粧しているだけの顔である。たまに昔を知る人に会うと相変らず若いなどと言われているけれど、こうしてまじまじと鏡の中の自分を見詰めていると年齢は争えないというのはこのことだと思ってしまう。

彼がしげしげとこの家に来た頃、正子は松の間に顔を出す前には、必ずこの鏡台の前で化粧直しをしたものだった。今また正子はクレンジングで顔を拭き直し、最近急に出まわってきたアメリカ製の化粧品で化粧を始めたのだが、どうしても二十八年昔の顔には戻らない。眼は昔と同じ

ように大きいつもりだけれど、実は老眼鏡がなければ字が読めないのです、今も自分の顔を眺めるのに、遠く半身を鏡から離して眼を細くしている。視界がぼやーっとしているために小皺が見えないのは有りがたい。

昔は白粉^{おしろい}下と言ひ、今はファウンデーションとかいう練油性の練白粉を、いつもより濃く塗りこみ、念入りにパフを叩き、眼のふちをガーゼ手拭いでこすり、口紅は思ひきつて赤いのをさしてみると、正子は自分ながら驚くほど気分が華やいできていた。

「鷹の間は、もうお食事運んでるの？」

台所に顔を出して訊くと、

「はい、ゆっくり始めて下さいと仰言ってます」

返事をした女中が、正子の顔を見て、ちよつと眼を瞠^{みは}った。正子はそれに気がついたけれども自分の方から目を外らして、配膳台の上にある盆を一つ持ち上げた。

廊下で膝をついて静かに襖を開けると、座談会はたけなわというところらしかつた。もう箸^{はし}とおつまみは出ているので、正子は刺身を運んできたのだけれど、生ものを出すのはちよつと早すぎたかと気がひけた。が、今日の正子は、いつもと違う。そつと部屋に入って、邪魔にならないように、音をたてないように注意しながら数客の前に刺身を置いてまわり、最後に先生と呼ばれた男の横顔をじつと見詰めた。

気がついたのか、正客は正子の方を省み、それまで喋りたてていた一人に向うと、

「日本にミンボーが始まってそろそろ十年になるのですからね、この人が仮にもせよマスコミという言葉を知っていたということを僕は注目すべきだと思ふんです」

と言ひ出したので、正子は耳の中がかあつと鳴り、顔が熱くなつた。しかし、同時に思った、

ミンボーって、なんだろう。マスコミと同じように英語なのかもしれない。戦争に負けてこの方、むやみと舶来の言葉がふえて正子のような人間はまったく閉口である。先生と目と目があったのと、その正子を一例にして何事か論じたてているのとで、正子は興奮したせいもあって彼が何を話しているのか内容はさっぱり分らなかった。

三度目に正子はその部屋に入って行ったとき、正子は新鮮なオレンジジュースを一杯盆にのせていて、部屋の片隅で黙々と筆を走らせている速記者の小さい卓の上においた。こういう席にはテープレコーダーだけのときもあるけれど、速記者という存在が大いにあるものである。彼らにはその暇がないので食事は出さないのが通例であり、話が終ればすぐ立って、鞆を抱えて帰って行ってしまう。しかし正子は速記者も客のうちだと思うので、女中たちが彼らをまったく無視することがあるとその度に氣を使った。鉛筆の先から文字とも思えない不思議な記号が流れ出す。機械のように素早く走る筆先を眺めていると大変な仕事なのだと毎度思ってしまう。

「お飲みになってね、今しぼらせたところですから」

小声で言うと、速記者は驚いたように顔をあげて、

「あ、すみません」

と大声で言い、座談会の方では先生が、ひょいと此方を見た。正子は慌てて部屋の外に出た。

居間に帰って、また鏡の前に坐り、このところ不精をしているけれど、髪を染めにいかなければいけないと思った。頒け目のところが、電燈の光を受けてチカチカ光っているのは白毛のせいである。正子は掻きあげ櫛を使って、髪の根の白さをかくすのに苦心した。

三度も鷹の間に入って観察した上での結論は、彼は山田一人ではない、というものだった。鷹の間の正客は山田と同じように眼鏡をかけていたし、正面から見た顔立ちは似ていたが、横顔は

まるで別人だった。第一、年齢が違ふ。山田一人が生きていたとして五十五歳より若い筈はないが、彼はどう見ても四十前後である。

違ふ。

明らかに人違いだったのに、この胸のときめきは何事だろう。

正子が部屋に入ってきたのを認めた彼が、すぐ正子を例にとつて議論を打ち出したところに正子は彼の優しさを感じたのだった。山田一人もそういうところのある男だった。正子を一人前に扱つて、正子の知識や感想を決してないがしろにするところがなかった。

やはり、似ている。

またバフで鼻の頭を押えていると、

「奥さん」

若い女中が妙な顔で入ってきた。戦前はおかみさんと呼ばれていたのが、いつ頃からか女中は奥さんと正子を呼ぶ。

「どうしたの？」

「玄関に、変なお婆さんが入ってきて、正ちゃん、正ちゃんって言ふんですけど。あの、足袋はだしなんですよ」

正子は驚いて腰を浮かした。

まさかとは思ひながらも、咄嗟に、それが誰だか見当がついたからである。正子は玄関に飛出して行った。

着物の襷先を表に三角に折り返してとじつけている。帯は古い半幅ものを、しどけなく巻いて、その前に、小さな顔が首から垂れ下っていた。この家を出て行ったときより、一まわり二まわり

ではきかないほど小さく縮かじんでしまったような老婆が、玄関たの三和土の上に、足袋はだしで立っていた。

「お婆ちゃん」

「ああ、正ちゃん」

正子が声をかけると相手もよくよく嬉しかったのか、こう言ってから糸の切れた人形のように玄関にへなへなと坐ってしまった。

「お婆ちゃん、あなたどうしたんです。まあ足袋はだしで、どこから出てきたんですよ。お婆ちゃんは知ってるんですか」

正子も三和土へ飛降りて老婆を抱き起そうとしたが、ちょっとした力で軽々と彼女は正子の腕の中に抱き上げられた。

「正ちゃん、正ちゃん」

正子の腕の中で、老婆は幼児のように呟きながら、見ると涙が流れている。この齡で自分の娘の家を飛び出してきたのだろうか。それならばよくよくのことがあるのに違いない。鳶代とはここ十年以上も顔を合わせたことがない。その阿漕あこな稼きぎぶりは噂でよく聞いているけれど、今は正子はマスコミという堅気相手、鳶代は相変らず待合まがいの水商売で、行き来もなくなっていた。付き合いが断たれた原因の一つは、戦争中は焼け出されて正子のところへ転がりこんできた鳶代が、戦後になって待合を再建して返り咲くとき、正子の店の顧客も女中もごっそり引き抜いて行ったからだ。正子は堅気で地道な割烹旅館をめざしていたから、鳶代の流儀が好きな客なら女中なら、正子の店とはもともと縁のなかったものと思い、大して意にも介さなかったのだけれど、流石の鳶代も敷居が高くなったのか、疎遠になっていた。